

寄稿

# 安楽死に対する仏教の一視座

龍谷大学文学部教授 博士(文学) 鍋島直樹

「安楽死は、人それぞれ違った意味で使用されやすい。そこで、安楽死を世界医師会の国際水準に基づいて定義したうえで、仏教から安楽死をどう考えたらよいのかについて究明したい。

世界医師会(WMA)は、2019年、「安楽死と医師の支援を受けてなされる自殺に関するWMA宣言」(日本医師会訳)をトビリシ総会で採択した。

安楽死(Euthanasia)：患者自身の要請に基づき、意思決定能力を持つ患者に致死薬物を意図的に処方、または患者の死を招く介入を実施する医師の行為と定義される。

医師の支援を受けてなされる自殺(Physician-assisted suicide)：意思決定能力を持つ患者の自殺に、医師が患者の死を招く意図を持って、薬物を処方または提供するといった行為によって、意図的に患者の人生を終わらせるようなケースを意味する。



鍋島直樹(なべしま・なおき) 龍谷大学文学部教授、博士(文学)

「世界医師会は、医の倫理の原則に対する強い関与、そして、人間の生命を維持することを最大限尊重しなければならないことを繰り返して述べている。したがって、世界医師会は安楽死と医師の支援を受けてなされる自殺に強く反対する。…医師は、安楽死または支援を受けてなされる自殺に、殺意を持って関与することを強制されるべきではなく、またそのような目的のために医師の紹介を行うことを強制されるべきではない」

世界においては安楽死と医師による自殺助成を認めている国は、カナダ、オランダ、ニュージーランドなど少数である。スイスでは、医師による自殺助成を認め、ディグニタスなど複数の団体が外国人にも医師による自殺助成を認めている。

日本においては安楽死も医師による自殺助成も認められていない。医療は患者を死なせるためにあるのではなく、治療とケアによって、その人らしく生きるの

に支援を受けることができる。殺意を持って関与することを強制されるべきではなく、またそのような目的のために医師の紹介を行うことを強制されるべきではない」

世界においては安楽死と医師による自殺助成を認めている国は、カナダ、オランダ、ニュージーランドなど少数である。スイスでは、医師による自殺助成を認め、ディグニタスなど複数の団体が外国人にも医師による自殺助成を認めている。

日本においては安楽死も医師による自殺助成も認められていない。医療は患者を死なせるためにあるのではなく、治療とケアによって、その人らしく生きるの

を支援するためにあるからである。日本における安楽死の法的要件については、1995(平成7)年の横浜地方裁判所における公判で、「医師による積極的安楽死の4要件」として、①耐え難い肉体的苦痛があること②死が避けられず、その死期が迫っていること③肉体的苦痛を除去・緩和するために方法を尽くし、他

に手段がないこと④生命の短縮を承諾する患者の明確な意思表示があること⑤が提示されている。さらに、世界医師会はトビリシ総会で、「治療を拒否する患者の基本的権利を尊重する医師が、望まれていない医療を控える、または中止する場合には、患者の希望を尊重することが死という結果を招く場合であっても、非倫理的な行為

2004年、日本医師会第四次生命倫理懇談会の『医療の実践と生命倫理についての報告』に、こう記されている。「死に対する戦いの終わりにともな、より良い生活を完遂する努力、すなわち尊厳を保って生を全うすることの手伝いができたという成功感を共に確かめ、心の中に整理しておくことが、国民に対する責任を果たすことにも通じるであろう」

に手段がないこと④生命の短縮を承諾する患者の明確な意思表示があること⑤が提示されている。さらに、世界医師会はトビリシ総会で、「治療を拒否する患者の基本的権利を尊重する医師が、望まれていない医療を控える、または中止する場合には、患者の希望を尊重することが死という結果を招く場合であっても、非倫理的な行為

2004年、日本医師会第四次生命倫理懇談会の『医療の実践と生命倫理についての報告』に、こう記されている。「死に対する戦いの終わりにともな、より良い生活を完遂する努力、すなわち尊厳を保って生を全うすることの手伝いができたという成功感を共に確かめ、心の中に整理しておくことが、国民に対する責任を果たすことにも通じるであろう」

患者は死むために病院に来たのではない。最後まで少しでも良くなって生きるために医療はある。医療の目的は、患者に適切なアセスメント(評価)と対処(治療・処置)を行



他者によって生きる意味は見出される(写真はイメージ)

るものなのである。…私も一時は母を哀れんで死なせようと思ったのだが、そうしなかったのはすんでのところ母の身体から、そのような声―あなたたちといたいから、別れたくないから生きている―が聞こえたからだ」

「生きる意味は他者によって見出される」という川口さんの言葉に慧眼を与えられた。動けず話せない母の気持ちを娘の彼女が気づいたことを教えてくれる。

「しかし、生きる意味は生きて死んでいったのである。…進行したALS患者にはならないと宣言した。すなわち、患者の事前意思に基づいて、延命医療を差し控え・中止することを世界医師会は認めている。

▼筋萎縮性側索硬化症(ALS) 全身の筋肉が衰える病気。神経だけが障害を受け、体が徐々に動かなくなる一方、感覚や視力・聴力などは保たれる。公益財団法人難病医学研究財団が運営する難病情報センターによると、年間の新規患者数は人口10万人当たり約1〜2.5人。進行を遅らせる薬はあるが、治療法は見つかっていない。

## 生きる意味 誰が見出す

### 臨終に善し悪しはない

「それはどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」(『歎異抄』後序)

「現にこの通りの私、どうしようもない苦しみをかかえた私を、仏は救う。そのままで、自分が願われた存在であると感じられること、そこに深き救いがある。

「死の縁は、かねておもふにもかなひ候はず、にはかにおぼち・みちにおぼる事も候。…日ごろの念仏申て極楽へまいる心だにも候ひとならば、いきのたえん

臨終においては、患者が臨終の床で、外見を取り繕わなくてもよいとされる。患者も看取る人も、ありのままに傷つき悲しむことが出来る。患者はそのままの仏の慈悲に抱かれているからである。

法然は、『往生浄土用心』でこう述べている。「死の縁は、かねておもふにもかなひ候はず、にはかにおぼち・みちにおぼる事も候。…日ごろの念仏申て極楽へまいる心だにも候ひとならば、いきのたえん

「まづ善信(親鸞)が身には、臨終の善悪をば申さず、信心決定のひとば、疑いなければ正定聚に住す

るものなのである。…私も一時は母を哀れんで死なせようと思ったのだが、そうしなかったのはすんでのところ母の身体から、そのような声―あなたたちといたいから、別れたくないから生きている―が聞こえたからだ」